

## 現場に聞く、DXのリアル!

着工減、人材不足など住宅業界を取り巻く問題は挙げればきりがありません。しかし、こうした状況の中でも、DXを取り入れながら新たな一歩を踏み出している工務店様が各地に広がっています。そんな素敵な工務店様の姿から、何かしらのヒントや活力を見出しただければ幸いです。

## Takaki - Home.



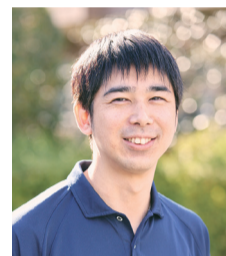
# 職人にもお客様にも視覚で逐一情報共有 信頼の家づくりを支える、現場でのDX活用



執行役員  
住宅資材本部副本部長  
飯田 博之



住宅事業部／タカキホーム  
工事第一グループ長  
栗原 健



住宅事業部／タカキホーム  
工事第二グループ長  
樋口 遼

株式会社タカキ 住宅事業部／タカキホーム

〒184-0004 東京都小金井市本町 1-12-6 TEL 042-387-5555 FAX 042-387-5556

<https://www.takaki-home.net>



—貴社の成り立ちと、現在どのような家づくりに取り組まれているのかを教えてください。

**飯田：**株式会社タカキは1956年、材木店として創業、住宅資材の販売、木材プレカット加工を行っている会社です。1980年からは分譲事業も手がけ、住宅事業部であるタカキホームは施工会社として立ち上がり、現在は注文住宅とリフォーム事業として活動しています。

**栗原：**現在は年間に新築8棟前後、リフォームは大規模から小さな設備交換まで約300件を手がけています。私たちの注文住宅の大きな特徴は「WB工法」を採用している点です。WBとは、Double Breath（ダブル・ブレス）を略した言葉です。今の住宅は機械換気が主流ですが、WB工法は電気や機械に頼らず、形状記憶合金のバネを利用して通気口を自動開閉させ、家全体の空気を自然に循環させます。家の呼吸、壁面の呼吸、2つの呼吸により、化学物質や湿気がこもらず、室内環境を常にクリーンに保てるのがメリットです。

当社は、もともと建築家の方々とコラボレーションした家を数多く手がけてきた経験があり、現場の技術力には自信があります。その中で「本当に住む人にとって良い家とは何か」を追求した結果、15年ほど前からこのWB工法

を自社の核として据えるようになりました。最近では、YouTubeなどでWB工法の情報を得たお客様が、東京でこの工法ができる会社を探し、わざわざ我々を指名してくださるケースが増えています。

## 現場管理でLog Systemを活用 各施工工程の記録が残る安心感

—貴社では、現場の効率化のため、リモート施工管理プラットフォーム「Log System」を活用しているとお聞きしました。導入されたきっかけを教えてください。

**栗原：**タカキの高木聡社長より試しに使ってみないかと提案があり、2021年ごろから使い始めました。現場監督をしている身からすると、現場を360度VR空間として撮影できる点、我々が直接現場に行かなくても状態が分かるというメリットはとても感じました。

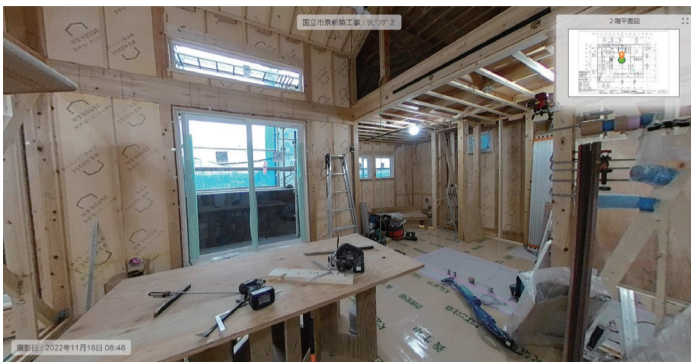
—実際に運用してみて、現場ではどのような変化がありましたか。

**栗原：**我々は、Log Systemのうち、建設現場

をVR空間で記録・管理するツールであるLog Walk（ログウォーク）を主に使っているのですが、導入した最初はかなり苦労しました。現場の職人さんは高齢の方も多く、まだスマホではない従来型の携帯電話を使っている方もいらっしゃいました。スマホの操作やカメラの接続に抵抗がある方もいて、「俺はやらないよ」と引いてしまうケースもありました。若い世代の職人さんに率先して協力してもらったり、私たちが現場で丁寧に説明したりしながら、少しずつ浸透させていきました。今では、週に2回程度、現場の様子を撮影してもらうルールを運用し、新築注文住宅のすべての現場、すべてのお客様に対してデータを共有する体制を整えています。

**飯田：**Log Systemを導入してから、職人さんの現場への意識も変わりました。毎週写真が公開されるので、各現場が格段に綺麗になりました。

**樋口：**最大のメリットは、施工工程のそれぞれの時期の記録がデータに残るという安心感だと思います。以前はスマホで現場の一部を撮り記録していましたが、どうしても記録漏れが発生します。しかし、360度カメラならその空間のすべてが写っているため、後からの確認が可能となります。特に重要なのは「壁の中」です。工事が進むと、断熱材や金物、配線などは見えなくなってしまいます。例えば、引き渡し直前にお客様から「ここに柵を追加してほしい」と言われたとき、過去の



## Log System によって 施工状況の段階に応じた画像を確認することが可能



データを見れば、壁の裏のどこに下地があるか、配線がどこを走っているかが一目でわかります。以前は壁に針を刺して探したり、最悪の場合は壁を壊してみたりしないとわからなかったことが、スマホ一つで瞬時に判断できる。このスピード感と正確性は、新築住宅だけでなく、リフォームやアフターメンテナンスにおいても絶大な威力を発揮しています。

—現場監督の負担も軽減されましたか。

栗原：複数の現場を抱えていると移動時間だけで1日が終わってしまうこともありますが、Log System を使うことで事務所いながら現場の進捗を詳細に把握できます。管理の質が上がっていると感じます。

—お客様には、Log Walk で記録したデータを提供しているそうですが、その反応はいかがでしょう。

栗原：非常に好評です。今は共働きの方も多く、なかなか現場に足を運べないお客様も少なくありません。大体週に一度のペースで、Log Walk を使って撮影した施工現場の様子をお送りしているのですが、みなさま喜んで見てくださいますし、中には図面と見合わせて細かくチェックされる熱

心なお客様もいらっしゃいます。透明性の高い情報公開をすることで、工務店とお客様の間の「信頼の可視化」ができていていると感じます。

## 施主と工務店の良好な関係構築へ AI などデジタル補完の対話検討も

—Log System 以外でも現場で活用しているデジタルツールはありますか。

栗原：やはり「LINE」を使った連絡が便利です。職人の中には新しいアプリを入れるのに抵抗がある方も多いですが、普及している LINE なら誰でも使えます。現場ごとにグループを作り、進捗連絡や工程の変更を共有しています。

樋口：FAX で図面を送ったりしていた頃と比べると、情報共有のスピードは圧倒的に早くなりました。また、Log System には図面ファイルをクラウドに置ける機能もあり、使い慣れた職人さんは確認したい図面を自身でダウンロードして確認してくれます。こちらも指示を出す手間が省けるので、非常に助かっています。

栗原：現状は LINE のビデオ通話で事足りる場面も多いですが、検査などより厳密な記録や遠隔指示が必要な場面で DX ツールを活用していくこと

も検討しています。

—今後、DX 活用により取り組みたい課題はありますか。

樋口：カスタマーサービスの面で、AI の活用に注目しています。最近はお客様が家づくりに関する情報を勉強し、プロ並みの知識を持っていることも珍しくありません。さらに、こだわりのあるお客様の場合、コンセントの位置など、非常に繊細なコミュニケーションが求められる場面も増えています。

お客様との打ち合わせにおいては、今後はコミュニケーションを円滑にするために、DX ツールを活用することも考えています。例えば、当社の施工ノウハウや個々の社員の知識を AI に学習させ、お客様からの問い合わせに即座に、かつ正確に答えられるような仕組みがあれば理想的ですね。お客様と工務店が良好な関係で一緒に家を作っていくために、デジタルで補完できる部分ももっとあるはずです。

飯田：私たちは大きな会社ではありません。だからこそ、社員が目目の前の一棟一棟に全力を尽くす今のスタイルを大切にしていきたいと考えています。Log System のようなツールで効率化を図りつつ、これからも技術と信頼を積み重ねて、選ばれる工務店であり続けたいです。